
ムック

ぬじゅわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムック

【Zコード】

Z3680M

【作者名】

ぬじゅわきし

【あらすじ】

ポンキッキのムックは実は凶悪な寄生怪獣だつた！？人々に襲う
ムックの恐怖！

夜。奈穂子と達志は『デート』で映画を観た後に街を歩いていた。その内公園に着いたので一人はベンチに座った。一人の向かい側のベンチに公園に住む小綺麗なホームレスがちくちくと何か服を縫っていた。二人は話した。

「映画、面白かったねー。」

「主役がかっこいいよな。」

「『お前に咲かせる花はねえ』ってセリフ。かっこいい……」

「良かつた。」

「ねえ、達つちはどう思つ？あのラスト。」

「ううん、俺は、あれで良かつたと思つ。あの悪者、ビクとなく悲哀を感じるし。」

「ふーん、あ、メールだ。あ、ねえ、見て。」

「何？」

「この間、友達とプリ行つたんだ。」

「ふーん、可愛く撮れてるじゃん、奈穂ちゃん。」

「ありがと。達つちもかっこいいよ。」

「そうかよ？」

その時、「そこの若いお二方！」としづがれ声で呼ぶ声が聞こえた。二人は振り向いた。恐らく向かい側のホームレスだ。ホームレスは顔を下に向けたまま話した。

「あなたたち、夜遅いんだから、早く帰りなさい。」

達志は舌打ちして言い返した。

「なんだよ？俺達の勝手だろ？何が悪いんだよ？」

「悪い悪くないの問題じゃない。身の安全のためだ。早く帰りなさい。」

奈穂子も不安になつて「帰りましょっ」と達志に言つたが達志は再び言い返した。

「俺ガキじやねーんだぜ。そこのワルから身を守るぐらこの力はあらあ。」

「では言おう。」この公園の周辺で、『ムック』といつ怪物が現れるいるのだ。下手に手を出さない方がいい。」

「ムック？ポンキッキのムックか？」

「そうだ。」

「ははっ、おっさん、何を言つてるんだ？行こう奈穂ちゃん。別の場所に行こう。こいつは頭が病氣なんだ。」

「まあ、そう思つていればいいさ。まあ何かがあつたらいつでも相談に乗るう。縁のテントにいるよ。」

「なんだこいつ。行こう」

奈穂子と達志は公園の別の場所へ行つた。そしてベンチに座つて。話した。

「へんなおじさんだね。」

「そうだね。」

「ムックって何だろ？。」

「気にするな、おっさんの妄想だ。」

「あ、何か落ちてる。」

「ホントだ。何だろ？…あ、鉄のパイプだ。誰かテント建てて放つといつんだ。」

「可哀想に…でも何でだろ？…慌てたから？」

「ばか、お前ムックの事考てるだる。たんに忘れただけだよ。俺よりムックの事考えて。」

「もー嫉妬深いのね達つちは。」

その時、高い高い悲鳴が聞こえた。奈穂子はびくつとして訊ねた。

「…何かしら。」

「…気にするな、ただの悲鳴だ。」

「そうちしら。」

再び別の悲鳴が聞こえた。奈穂子はそわそわした。

「いやよ、何が起きてるんだわ。行きましょう。」

「大丈夫じゃね？」

「何言つてゐの！」

次の悲鳴と共に、沢山の足音が聞こえた。大勢の人々がこちらに向かって逃げてきた。ある人が言った。

「早く逃げる！やつて来るぞ！わあああ！」

人々が一目散に散り、奈穂子は振り返った。その途端奈穂子は恐怖で逃げるどころか動けなくなってしまった。何かが驚くほど速くこちらに接近してくる。それは紅かった。紅い触手に覆われ、走る度に触手は高速に蠢いていた。目が見えた。その目は飛び出していてあらぬ方向を見ていた。口もあつたが、中は闇のように真っ暗だ。その名はムック。

「危ない！」

達志は奈穂子を突き飛ばした。一人の間にずぼぼぼぼとムックがベンチを突き破つて通り過ぎた。ムックは停止し、何本も生えている触手の足で後ろを振り返った。

「きやああ！」

奈穂子が悲鳴を上げた時、達志は先程持つっていた鉄パイプでがん、とムックを殴つた。ムックは「ぎええええ」と悲鳴を上げてのたうち回つた。達志は何度もムックを殴つた。途中ムックの触手が達志の足に伸びて「アツツ！」と火傷したが、達志はめげずに殴り続けた。やがてムックは力を失い、触手は溶けた。中に痩せ細つた人間のような者が出でてきた。

「これは？」

「さあ…達つち大丈夫？」

「俺は大丈夫さ。」

「でも、足…」

「なあに、ただの火傷だよ。大した事はない。」「でも病院行きましょう。」「そうだな…」

二人は公園内を歩き続けた。達志は軽くびつこを引いてる程度で大した傷ではないみたいだ。沈黙した状況を励まそうと奈穂子は言った。

「何か映画みたいだね。」

「そうだな。ははははは。」

「あははははは。」

「ははは…ん？」

突然達志は立ち止まり下を見つめた。どうしたの。奈穂子の無言の問いかけに彼は応じない。しばらく沈黙。

そして、達志の火傷から突然一本の紅い触手がぶちっと生えてきた。

「きやあ！」

触手は奈穂子を捉えようと必死に伸びて蠢いていた。達志は呆然として彼女を見た。次の瞬間、ぶちぶちぶちと触手が生えてきた。達志は跪き、その内両腕が奈穂子に伸び、言った。

「わわわわわ、手が勝手に！」

触手はますます密生するのを見て奈穂子は逃げ出した。達志はムックになってしまったのだ。

必死に逃げ惑う奈穂子の背後で、しばらくして「じおおぶつぶつ」と吠え声が夜空に響き渡った。奈穂子は全力で逃げ出した。

その時である。

「じちらく！」

先程のホームレスが車から奈穂子に呼びかけた。奈穂子は急いで車に乗つた。車は走り始めた。

奈穂子は助手席にいた。そして運転手を見た。今の今までホームレスの顔をはつきり見なかつたが、このとき確認した。出っ歯でたれ

目、そして緑色の皮膚。

「あなたは！！！」

「そうだ、私はガチャピンだ。大人になつた途端ブサイクだと言わ
れ失業したのだ。」

「でも・・・・どうして・・・ムックは・・・」

「そもそもポンキッキは異星人交流の場として用いられた番組だ。
そう、私は、異星人だ。ムックも。だが、ムックは言葉が話せなか
つた。だから地球人がアフレコをつけたのだ。」

「・・・」

「ムックは、バンドミニン星人に寄生しているうちはおとなしかった。
だが、ある日、人間に寄生した途端、凶暴になつたのだ。原因はわ
からない。私はムックを退治しに行つた。そしてムックはここに追
い込まれた。」

「・・・」

「残つたムックはあと一体だ。たぶん、この車を追いかけている。
後ろをみてござらん。」

奈穂子は振り返つた。ぞぞぞぞぞと全身から触手を生やしたムッ
クがこちらに向かつて猛烈なスピードで追いかけていた。徐々に接
近している。

「ぎゃあああ！・・・早く逃げてよ。」

「分かっている！だがあいつは速過ぎるーやつをまじうー。」

そしてガチャピンはハンドルを回して、急激に右折した。ブレーキ
の音が鳴り響く。そしてさらに左折し、右折し、右折した。しんと
した都会の角。「まいたかな？」とガチャピンは言つた。次に指示
した。

「車を捨てよ。」

「え？でも歩いたら・・・危険では・・・」

「大丈夫。任せなさい。言っておくがムックの嗅覚は排気ガスを見分ける。だから乗つてもムダだ。」

そしてガチャピンと奈穂子は隠れた。しばらく待つた。ガチャピンは武器のようなを取り出した。

「え、殺すの！？ダメだよ、あれはムックでも私の大事な達志なんです。」

「分かっている。」

やがて物音が聞こえた。ビルの上から影が現れた。ムックは虫が歩くようにぞわぞわとビルの壁を高速で徘徊した。あたりは暗くて、ムックは黒色にしか見えない。

ふとガチャピンは飛び出した。ムックは気づいてガチャピンに襲い掛かった。ガチャピンは持っているその武器を発射した。

ブシュン！

それはムックに命中し、ムックは急激に動きを失った。触手の動きも萎え、どろどろと溶けた。麻酔銃だったらしい。やがて液体の中から達志の身体が現れた。

「達志！」

だがガチャピンに静止された。

「あなたも感染してはいけない。とりあえず彼を病院に運ぼう。」

そして幸い達志は無事であった。ムックは無事摘出された。二人はガチャピンにこれでもかといつほどお礼をして、病院を後にした。

さて、ムックは、病院の研究室の水槽に保管されていた。無数の触手がわらわらとうごめいでいる。病院の職員が書類をぽんと置いたとき、その衝撃で、一瞬水槽のふたが動いた。

その時、触手の一本がゆっくりとふたの隙間から抜け出した。職員は大あくびした。

ムックに襲われ、職員はあわや苗床となつた。ムックは研究室を抜け出し、病院内を徘徊し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3680m/>

ムック

2010年10月9日20時41分発行